

令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等
1 総合学科の特長を活かし、GIGAスクール構想を踏まえた、主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業実践を通して、個に応じた進路実現を図る。	① 総合学科の特長を活かし、生徒の多様なニーズに合わせた科目選択や体験活動を通して、生徒の進路実現を図る。	進路指導 教務	【満足度指標】 総合学科の特長を活かし、科目選択や体験活動が生徒の進路実現に繋がっている。	総合学科として、科目選択や様々な体験が生徒の進路実現に意義あるものとなっている。 (ア)よくあてはまる (イ)ややあてはまる (ウ)あまりあてはまらない (エ)あてはまらない	(ア)+(イ)の% 90%以上 A 80%以上 B 70%以上 C 70%未満 D C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒・保護者)で調査する。	生徒 93.8% A 保護者 89.9% B	1年上級学校見学会・企業見学会・進路ガイダンス、2年インターンシップ・能美市企業ガイダンス、3年就職・進学合同説明会等、生徒が自己の進路について考える機会をタイムリーに設けたことが成果としてあらわれた。 保護者に対しても行事を周知し、特に3年の保護者の参加が多く見られた。その一方、1・2年の保護者向け説明会の参加率はそれほど高くなく、学校側の思いが十分伝わっているとは言いがたいため、積極的に参加を呼びかけていく必要がある。
	② 毎時間の授業において、学習目標、流れを明示し、振り返りをさせることで、学習内容の理解度と達成感を高める。	教務	【成果指標】 授業改善をととして分かりやすい授業を実践し、学習内容の理解度と達成感を高める。	授業が分かりやすいと回答する生徒の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	生徒による授業評価アンケートで調査する。	94.9% A	「授業がわかりやすい」についての肯定的な評価(「そう思う」+「だいたいそう思う」)は94.9%であった。一方、「グループ活動や発表」(11.8%が「あまりそう思わない」)、「ICTや学習教材の活用」(9.6%が「あまりそう思わない」)を課題としてとらえると、DX指定校の強みを生かしグループ活動や生徒の発表にデジタルツールや教材を活用し、授業にもっとインタラクティブな要素を取り入れることで、さらに良い授業を提供できると考えられる。
	③ GIGAスクール構想に則り、従来のICT活用に加え、今年度1人1台端末が整備されるChromebookを活用した授業の在り方について研究を進める。	教務	【努力指標】 学習効果を高めることを目標に、活用方法について実践研究を進め、Chromebookを使った公開授業を実施している。	年に2回以上Chromebookを使った公開授業を行った教員の割合が A 100%以上 B 80%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(教員)で調査する。	78.3% B	今年度は公開授業での交流が十分ではなかったために、前年度よりも評価が下がった。Chromebookの活用割合は9割を超えており、日々の教員の活用は定着している。 Chromebookの活用が授業改善につながるよう、次年度は公開授業を十分に行い、生徒の学習への興味関心を高め、学力向上につなげたい。
	④ 個別進学指導や朝学習(マナトレ)、模擬面接等の充実を図り、個々の生徒に応じた進路志望を達成する。	進路指導 各学年	【成果指標】 ア 国公立大学進学者数が、5%以上となっている。 イ 私立大学および看護・医療系上級学校進学者数が30%以上となっている。 ウ 就職内定率が、100%となっている。	ア・イ・ウの3指標のうち A 3指標すべてを達成 B 2指標を達成 C 1指標を達成 D 3指標とも達成できず	C、Dの場合、改善の検討を行う。	3月に集計する。	C	国公立大学合格者は1名、私立大学および看護・医療系上級学校進学者は7名、就職内定率は100%であった。就職目標は達成できたが、進学は目標に遠く及ばなかった。 生徒数減少にともない、4年制大学進学希望者の数自体が減っている。指標を現実に即したものに直すとともに、早期から進学にも目を向けさせる働きかけをし、学力の底上げに手を打っていく必要がある。
学校関係者評価委員会の評価				・総合学科の特色を中学生に分かりやすく紹介して欲しい。 ・ICT活用は大切だが、端末に依存しない読み書き能力の向上が大切。				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				・授業のわかりやすさについての生徒の評価は高い。DXハイスクールの指定を生かして、ICT活用能力や探究心を向上させ、基礎学力の定着を土台として、進路実現のために必要な学力の獲得を支援したい。 ・マナトレイサスタディサブリを活用して、生徒の達成感とともに学習意欲を醸成したい。				

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等
2 授業及び部活動や体験活動を柱として、生徒のコミュニケーション能力や規範意識、自律心及び自己肯定感の向上を図り、人間力の育成に努める。	① 登校指導や街頭指導、地域に向いでの活動等しっかりと挨拶ができるよう指導を行う。	生徒指導各学年	【成果指標】 生徒・保護者・教員が「生徒は自ら進んで挨拶ができる」と評価している。	自ら進んで挨拶ができると回答した割合が生徒・保護者・教員のうち A 3者とも80%以上 B 2者が80%以上 C 1者のみ80%以上 D 全て80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒、保護者、教員)で調査する。	生徒 87.9% 保護者 84.0% 教員 51.7%  B	毎朝、生徒玄関での登校指導を1年間続けてきた。挨拶や言葉交わす生徒も少しずつではあるが増えているように思い、変化や成長を感じる。生徒、保護者に比べて教員の集計結果が、例年同様低い結果になっているが、卒業後すぐに社会に出ていくことを見据えた教員の厳しい目線の表れとも言える。 今後も、挨拶の大切さや良さを様々な形で伝えていったり、挨拶できる生徒を認めていくことで、生徒の自己肯定感、自己有用感を高め、自ら進んで挨拶できるよう学校全体で取り組んでいく。
	③ 部活動を通して、生徒の自律心を向上させ、人間力を育成する。	SCH推進室	【満足度指標】 生徒が部活動に主体的に取り組み努力することを通して、満足感や達成感を得ている。	部活動に対し、満足感や達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(生徒)で調査する。	76.3%  B	昨年同期84.1%に比べて7.8ポイント減となった。日々、生徒たちは部活動に励んでいるが、運動をする子しない子の2極化に加え、活動時間や活動内容などに満足感を得られないことが要因として考えられる。 生徒数減の影響で、部員数の少ない部が増えている現状であっても、部活動交流会をはじめ、少人数への手厚い指導や広い校舎環境を活用することにより、普段の練習や大会での成果などで満足感が得られるよう取り組んでいく。
	④ 「学校いじめ防止基本方針」をもとに、いじめの問題に学校が一丸となって組織的に対応する。	生徒指導	【努力指標】 いじめの未然防止に取り組み、発生時には迅速な対応をしている。	いじめの未然防止に取り組み、発生時には必要な情報を共有し、迅速な対応をする教職員の割合が A 100% B 90%以上 C 80%以上 D 80%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(教員)で調査する。	89.7%  C	わずかではあるがB評価に届かない結果となり、受け止めていく必要がある。学年3クラスで学年団の担任教員が3名という枠組みの中で、情報共有や連携をさらに密にしていくために、生徒指導課の中でも学年担当者を明確に決めて常に風通しを良くしておくことを考えていく。 今年度は3件のいじめを認知した。管理職、担任、学年団、生徒指導が連携し、いじめ問題対策委員会を開き、迅速に対応した。近年はSNSによるトラブルも起こっており、いじめについても多様性が認められる。生徒が教員の誰でも相談できる雰囲気作りも大切になる。些細な変化を見逃さずに迅速かつ適切に対応する意識を持っていきたい。
学校関係者評価委員会の評価				・挨拶やルール・マナーについては、生徒・保護者と教員の間で認識の差がある。社会生活の基本なので、意識向上を願う。 ・部活動については、入部を積極的に促して欲しい。地域の行事への積極的な参加は素晴らしい。				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				・生徒指導については、生徒会を活用しながら、生徒に納得感のある指導を行い、基本的な生活習慣の確立を促したい。 ・生徒数は減少傾向にあるが、令和7年度にコミュニティースクールの指定を受けることもあり、部活動においても積極的に地域とのかかわりを深化させたい。				

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	集計結果	分析(成果と課題)と改善策等
3 SCH (スーパー・コミュニティ・ハイスクール)として、地域連携の充実や学校情報の積極的発信、学校業務の効率化を図り、保護者や地域に信頼される学校づくりを推進するとともに、生徒が主体的に地域の活性化に貢献する資質・能力を育む。	① 地元自治体の行事や社会貢献活動への参加など、地域と連携した活動をより推進する。	SCH 総務	【成果指標】 生徒が地域の行事や社会貢献活動など地域と連携した活動に積極的に参加している。	地域の活動に参加した生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	それぞれの活動後に生徒にアンケートをとる。	83.5% A	昨年同期85.6%に比べて2.1ポイント減であった。中間評価に比べ、6.1ポイント増であった。要因としては、各部活動において積極的な地域行事への参加などが考えられる。今後も、能美市との連携事業をはじめ、イーグル隊、能美市インターアクトなど地域活動への継続的な参加を通して、地域の活性化に繋がる取り組みを行っていく。
	② ホームページの更新や学年や各課からの通信、メール配信を随時行い、学校の教育活動を積極的に発信する。	総務 SCH	【満足度指標】 本校の広報活動を通して、保護者が本校の教育活動や取り組みを理解し、満足している。	広報活動(学校ホームページ、学年・各課からの通信、メール配信)を通して、学校の取り組みがよくわかると回答する保護者の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	C、Dの場合、改善の検討を行う。	学校評価(保護者)で調査する。	保護者 81.4% A	昨年の評価より11ポイントダウンしている。ホームページのアクセス数は昨年度より27万件以上増加しており、関心の高さがうかがえるが満足度が低下している。学校ホームページの形式だけでなく動画の配信やQRコードなど多様な形式で発信していく必要があると考えられる。また教員だけでなく生徒が主体となった発信方法も検討する必要がある。
	③ 教員が担当業務に応じてタイムマネジメントの意識を高め、学校業務の効率化を推進することで、勤務時間外の労働時間を削減する。	教頭 各課主任 学年主任	【成果指標】 全教員が業務の効率化に向けてタイムマネジメントの意識を高め、より一層の時間外勤務の削減を図っている。	時間外勤務が月45時間以上であった教員の年平均人数が A 5人未満 B 10人未満 C 15人未満 D 15人以上	C、Dの場合、改善の検討を行う。	教員の勤務時間記録で調査する。	7.3人 B	時間外勤務が月45時間以上であった教員の数の平均は、昨年度最終評価の8.7人と比べて減少が見られた。教員アンケートにおいては、タイムマネジメントの意識は昨年度と比較すると93.7%から89.6%とやや減少している。 教員定数の減少により、特定の教員に負担がかかったり、多忙感が増加しないよう、管理職や主任が業務の進捗状況に気を配り、業務の平準化を図ることを心掛ける。
学校関係者評価委員会の評価				<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の学校であるという自覚が持てるように能美市内住民との積極的な交流を増やして欲しい。</li> <li>・教職員の困難な状況は計り知れないが、生徒の能力・意欲の向上については長けていると思うので、感謝とともに今後も期待したい。</li> </ul>				
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策				<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和7年度コミュニティスクールの指定を受けることや創立60周年記念の取組をとおして、地域に積極的に関わる機会を増やしたい。</li> <li>・教職員の働き方改革については、時間外勤務は少しずつ減少傾向にある。今後とも平準化に努めるとともに、時間外勤務の削減、年休の取得を促していきたい。</li> </ul>				